第６号
発行日
2021年1月1日

真宗教化センター しんらん交流館 たより

いま、あなたに届けたい法話 Ⅱ

真宗教化センター　しんらん交流館　たより（第6号）――いま、あなたに届けたい法話 Ⅱ
東本願寺

メールマガジン配信中（無料）

あなたの携帯・パソコン・スマホに
法話やしんらん交流館の最新情報を
お届けします！

毎月
第２・第４土曜日
朝配信中!!

登録はここから

https://jodo-shinshu.info/mail-magazine/

shinran@w.bme.jp に空メールをお送りいただいても登録できます

NEW! 東本願寺キャラクタースタンプ 第２弾！

東本願寺キャラクターの
かわいい LINE スタンプを
会話に添えてみませんか。

ご家族やご友人へのプレゼントにも最適です。

購入ページ
（LINE STORE）➡

第１弾はこちら➡

LINE アプリからの購入方法

- STEP1　LINE アプリを起動
- STEP2　下の「ホーム」ボタンを押す
- STEP3　上にある検索窓に「東本願寺キャラクター」と入力して検索すると表示されます

宗祖親鸞聖人 御誕生 850th 立教開宗 800th
真宗大谷派（東本願寺）

〈慶讃テーマ〉
南無阿弥陀仏　人と生まれたことの意味をたずねていこう

はじめに

新型コロナウイルス感染症の影響により、行事の中止・延期を余儀なくされる状況が続く中、多くの寺院では何とかして仏法を届けようと、さまざまに工夫がなされています。また、「よりどころ」を求めるさまざまな声が涌水のようにあふれ出している世の中の様子が見えて参りました。

このたびは前号に引き続き、法話集としての『しんらん交流館たより（第6号）』を発行いたしました。今回はインターネットにて配信しました「いま、あなたに届けたい法話Ⅱ」の法話五本と、同じくインターネットで配信しております大谷祖廟暁天講座の法話一本を一部加筆修正し、収載しています。有縁の皆様にお読みいただきたいと念じております。

なお、前号の法話動画や冊子を用いての学習会や同朋の会も開かれております。本冊子のデータ及び動画はしんらん交流館ホームページ（浄土真宗ドットインフォ）に掲載していますので、ぜひともご活用ください。

二〇二〇年十二月一日

真宗大谷派宗務所　企画調整局

目次

「いま、あなたに届けたい法話Ⅱ」

六字のみ名をとなえつつ　真宗大谷学園専務理事　真城　義麿　…2

愚身の信心　大谷専修学院長　狐野　秀存　…12

群生海　教学研究所長　楠　信生　…17

苦悩と大悲　金沢教区浄秀寺前坊守　藤原千佳子　…22

〝我欲手伝う仏〟在さず　同朋大学名誉教授　池田　勇諦　…30

「大谷祖廟暁天講座（二〇二〇年八月一日）」

世人、実に爾なり　大谷大学教授　一楽　真　…36

動画・本冊子のPDFデータの掲載ページ

しんらん交流館ホームページ（浄土真宗ドットインフォ）
「いま、あなたに届けたい法話」https://jodo-shinshu.info/ima_howa/

六字のみ名をとなえつつ

真宗大谷学園専務理事　真城（ましろ）　義麿（よしまろ）

法話の動画はこちら→

「聖（ひじり）空間」と「世俗空間」

二〇一九年の五月から元号が令和に変わりました。この令和という元号を発案されたのは、中西進という先生であります。その中西先生が、『日本人の忘れもの』という書物を書いておられます。その中で、中西先生は、「聖空間の回復を」ということを書いておられる場所があります。本日はそれに触発されて、いろいろと考えたことをお話し申し上げます。

「聖空間」に対するものとして、私は「世俗空間」あるいは「俗世間」というものがあるのだろうとそのように思うことです。「聖空間」というのは、仏間のような空間です。日常の私たちの勝った、負けた、得した、損したという空間とは発想や原理の違う空間です。この聖空間は、仏間を聖空間とするならば、仏さまの前の空間です。そこでは、仏さまから見たらどう見えるのか。あるいは、仏さまを意識しながら物を見る、感じる、考える。そういうことがあるのだと、そのように思うことです。

それに対して「世俗空間」は人間の知恵の空間です。つまりはあらゆることに対して、私に都合がいいようにと考えるのが、私たちの根本原理であります。そして、それを具体的なかたちにして動くのは、常に損か得か、勝つか負けるか、どちらが上か等々、私たちは自分の好都合を実現するためにさまざまなことを分けて、自分の欲しいところに自分のポジションを置きたい。そういうことを考える。それがこの世俗空間の特徴であろうと思います。

そうすると、この世俗空間では、人間の値打ち（価値）を見る時に、人間の「できる」ということが一番大事なことになります。もちろん、その「できる」の中身は、考える、する、ということであります。そういうことで、できる人からできない人まで、必ず序列がついていく。それは、能力ということもあります。所有ということもあります。あるいは、社会的地位ということもあります。私たちはそういう場面で、少しでもその序列の上位におりたい、いたい、そういうことばかりを考えながら生きているわけであります。その世界は「できたら認められる」ということですので、さまざまなことに関してできなくなると居場所が失われていくといいますか、生きていくのがつらくなるような、そういう空気をもってます。

また、それを遂行するためには、得をするための効率化や成果主義、あるいは比べるための評価、

競争などが人間を追い詰めていく。そういうことが、この世俗空間の中ではある種当然のように行われていきます。

自分にとっての不都合を遠ざけ、あるいは見ないようにし、自分より好都合な人をうらやんだり、あるいはそれに対して劣等感を抱いたり、場合によったら攻撃的になっていく。そのようなこともこの世俗空間の中では起こっていきますし、得につながらないこと、勝つということにつながらないこと、地位が上がるということにつながらないこと、そういうことに関しては無関心になっていく。あるいは、見ようともしなくなっていく。そういう空間が世俗空間であろうと思います。

それに対して、聖空間は、仏さまの前の空間でありますから、仏さまから見たらということになります。そうすると、人間はいつ、どんな場合でも、どういう状況になっても、できる、できないを問わず、あらゆるいのちが、あらゆる人が、存在そのものとして無条件に尊いのであると認められていく。それが、この聖空間の特徴であろうと思います。つまり、そこには一切の序列、差別、排除、そういうものはなく、完全に平等なのだと。いのちを分けてはならない、いのちに序列をつけてはならない。それが聖空間であります。聖空間での人間の価値を見る目であります。

無量寿の世界

「正信偈」の一行目で、親鸞聖人は南無阿弥陀仏を「帰命無量寿如来と言い換えておられます。この無量寿ということも、いのちを量ってはならないというふうに私は受け取っています。この聖空間と世俗空間の両方を私たちは、実は行ったり来たり、あるいは重ね合わせて生きているわけであります。

昔の大きな商店では、従業員の中で大番頭（おおばんとう）、筆頭番頭から末席の丁稚（でっち）さんまで、非常に厳しい序列の世界がありました。しかし、そのお店は、それが真宗門徒であれば、朝夕、仏間でお勤めの時間があります。その当時、丁稚さんというのは、畳の上に上がることは許されませんでした。土間か板の間しかいてはならなかったわけです。しかし、朝夕、その仏間では、もちろん畳の部屋ではありますけれども、主人とその家族、大番頭から丁稚さんまで、みんながその畳の上に座って、同じ方向を向いてお念仏を申し、「正信偈」をお勤めする。そういうことがあったわけです。

そうすると、丁稚さんは、仕事の場では序列の最末端、一番底にいるけれども、人間は仏さまの前では、みんな等しく平等なんだということを感じる機会があったということであります。そのことは大変に大事なことであろうと思います。

一方、世俗空間では、人間というのは損得や、勝ち負け等の対象でありますから、どうしても、今

生きている人のことだけをイメージするようになります。そうすると、人生は、生まれてから死ぬまで、死んだらしまい。そういう世界であります。それに対して聖空間、仏さまの前に身を置いてみますと、亡き人と交流ができるということを、皆さんは日常的に経験されておられると思います。今もありありと生きておられるように、その方とこころの中でお話しができ、あるいは語りかけ、問いかけ、あるいは愚痴を聞いてもらう。そのようなことも含めて、また、先祖代々のはるか昔からの長い長い、いのちの歴史に自分のいのちは連なっているのだと。それからそれは、私が死んだ後にもあるんだということを感じるわけであります。

つまり、人生には生まれる前も死んでから後もあるのだと。死んだらしまいなんかではないんだ、そういうことを感じる。つまり、それも大変豊かないのちの世界。それも、無量寿ということで言えるのではないかと思うことであります。限りがない世界が、無量寿の世界であります。

「私のために」「私のことを」

それから、私たちは当たり前のように、日常生活の中で「私は」「私が」と言って生きています。ほとんど疑うこともなく、あらゆることの主人公は私でなければならない。この私は「他の人と異

なって、この私は」ということで、さまざまなことを考えていく。この私が、いかに好都合を享受し、不都合から逃げ、あるいは場合によっては不都合を他の人に押し付けながら生きるか。「私は」というところに立てば、そういうことに無自覚になってしまいます。

しかし、聖空間というのは、最初に申し上げましたように、仏さまの前の空間であります。ご本尊のお姿をよく見てみますと、仏さまのところから光が発せられているお姿になっております。

そして、この仏間にいるものは全て、その仏さまからの光を受け取る側にいるのだということであります。ということは、この仏間、聖空間の中では、「私は」に当たる主語は、「仏さまが」「仏さまは」ということになるわけです。そうすると、私たちはどういうことになるかというと、「私のために」「私のことを」、そういうところに身を置いているということであります。

親鸞聖人は私たちが日常的に一番よくお勤めするご和讃、

弥陀成仏のこのかたは　いまに十劫をへたまえり
法身の光輪きわもなく　世の盲冥をてらすなり

（『真宗聖典』四七九頁）

の後半に、「法身の光輪きわもなく　世の盲冥をてらすなり」と書いてくださっておられます。「法身」というのは、真実が仏さまのお姿になってくださっているのを法身といいます。「光輪」という

のは、光の輪。輪ということは、半径が同じでありますので、つまり、どの人にも平等に届くということであります。「きわもなし」というのは、ここで終わりとかここまでということがない、どこまでもということです。まったく制限のない、どこまでもその光は届いていくのである。そして、「世の盲冥」というのは、世俗空間の中で、目は開いているけれども物を正しく見ることができない。それを世の盲冥と言います。それを照らしてくださる。そのことによって私たちは、完全ではありませんけれども、今まで見えなかった物を見ることができる、そういうようなことがあるのであります。

あるいは、その次のご和讃、

智慧の光明はかりなし　有量の諸相ことごとく
光暁かぶらぬものはなし　真実明に帰命せよ　（同前）

これも同じことであります。このように親鸞聖人の「弥陀成仏のこのかたは」で始まる六種のご和讃は、六種とも全て阿弥陀さまより光が発せられ、そして、その光は一人の例外もなく、私たち一人ひとりに届くのだということを伝えています。

私たちは、その仏さまから届けられた光を感じる、あるいは受け取ることで、仏さまの智慧にアクセスすることができると言いますか、さまざまな物を見る目、感じ方、考え方。そういうものを仏さまからいろいろと教えていただくわけであります。

「私が」ということではなく、「私のために」「私のことを」という視点から現実や過去や未来を見ていく、考えていく。そうすると、私たちは、「私が」というところから発想しますと、どうしても足りないこと、満たされていないこと、思いどおりにならないこと、あるいは孤立しているのではないか、そのようなところに思いが行きがちでありますけれども、「私のために」「私のことを」というところに立ってみると、そういう私たちがさまざまに支えられ、包まれ、そして、さまざまな方々やいのちとつながっていたのだということに気付き、感じられ、また、願われていたんだな、案じられていたんだな、そんなことを思うことであります。

六字のみ名

さて、具体的なかたちとしての聖空間に身を置くことができなくても、私たちは南無阿弥陀仏という六字のみ名を称えることで、いつ、どこで、何をしておっても、その空間が聖空間となり、その時間が、その時が、聖時間となるのであります。そのことによって、私たちが世俗の中で見失っていた自分自身、仏さまから願われ呼びかけられている、その自分というものを取り戻す。目が覚めて我に

返る。そういうことが起こってくるのであります。

この念仏との出遇い、そして、その念仏の生活をとおして、できない私、わかっていない私というところに立ち続けられたのが親鸞聖人であります。その親鸞聖人は、『歎異抄』という書物の中で、「日ごろのこころにては、往生かなうべからず」（『真宗聖典』六三七頁）とおっしゃっておられます。「日ごろのこころ」というのは、私たちの日常の物の考え方、つまり俗世間での意識、発想、判断、そういうものであります。それでは往生はかなわないよといわれるのです。往生するということは、さまざま思いどおりにならない現実を抱えながらも、支えられて生きていくことができる。そういうことであろうと思います。

私たちが当たり前だと思っている日常、損得、勝ち負け、上下、さまざまな優劣、あるいは自分と自分の身内さえよければいい。そういうものが念仏から問い直されていくわけであります。

『真宗宗歌』という歌がありまして、その二番は「とわの闇より救われし　身の幸なにくらぶべき　六字のみ名をとなえつつ　世のなりわいにいそしまん」という歌詞であります。私たちは、どうしても生活は生活。念仏は念仏ということになりがちであります。そうではなくて、世のなりわい、生きていくためにしなければならないことを一生懸命頑張る。しかしそれは、六字のみ名をとなえつつでなければ暴走してしまう、他が沈んでしまうことで自分の思いが満たされる方向になるということであります。

今まで、見ようともせず、むしろ隠そうとしていた自分自身が、念仏によって明らかになる。できない私であった。お恥ずかしい私であった。しかし、その愚かな無自覚な私のことを阿弥陀の本願が支えてくださっていた。あるいは、私は一人ぼっちではなかった。如来に寄り添われておったんだ。見捨てられてはいないんだ。あるいは、私は迷子ではない。私には、過去も現在も未来もある。その未来は浄土ということで、私たちの進むべき方向が示されておるところであります。

世俗空間の中で、本当はよくわかっていないのに、その中で「私が」「私は」と頑張っておりました。その私であったと。南無阿弥陀仏という六字のみ名が私を見せてくれる。私自身に出遇わせてくれる。私の生き方を問い直してくれるのであります。そうなると、本当のことが知りたい。もっと聞きたい、ちゃんと学びたい、そういうこころが動き始めます。

どうか、日常に埋没し、目の前で起こることに一喜一憂するしかない私たちでありますけれども、お念仏の声に目を覚まされながら進んでいきたいものだと思うことであります。以上で私のお話を終わらせていただきます。どうもありがとうございました。南無阿弥陀仏。

愚身（ぐしん）の信心

大谷専修学院長　狐野（この）　秀存（しゅうぞん）

法話の動画はこちら→

浄土真宗の入り口

初めに一つのエピソードを紹介したいと思います。今も街角のあちこちに、「怪しい人と思ったら一一〇番」という看板が出ておりますけれども、かつて、児玉暁洋（こだまぎょうよう）先生がそれを見て「うふふ」と笑われて、「一番怪しいのは自分じゃないか」とおっしゃいました。児玉先生は二〇一八年にお亡くなりになりましたけれども、真宗の世界に生きた先生らしい言葉だなあと思っております。浄土真宗の入り口、扉は、「問題は我にあり」です。今日は、「愚身の信心」ということでお話しをしたいと思っています。

この「愚身の信心」という言葉は、『歎異抄』の第二章の終わりに出てくる親鸞聖人のお言葉です。『歎異抄』の第二章と申しますのは、念仏をしてどうなるのかという疑いや不安を抱いて、関東から親鸞聖人を訪ねて来られたお弟子たちを前にして、親鸞聖人が「あなた方はきっと往生極楽の道を問い、尋ねたいのでしょう」と、みんなの本心をずばりと言い当てるところから始まります。

そして、親鸞聖人はご自身の信心を簡潔明瞭に述べられています。

親鸞におきては、ただ念仏して、弥陀にたすけられまいらすべしと、よきひとのおおせをかぶりて、信ずるほかに別の子細（しさい）なきなり。

（『真宗聖典』六二七頁）

ここに聖人の真実信心というものがすべて言い尽くされているということになろうかと思います。

自力のこころ

問題は、「ただ念仏して」と言われている、「ただ」ということ。このことが一番難しい。私どもにとってみれば本当に困難なことなんです。と申しますのも、そもそも私どものこころというものが、決してただのこころではないからなんですね。ただこのこと一つというふうにこころが定まらないで、あれもこれもと、「ふたごころ」と言いますけれども、「ふたごころ」どころか三つも十も百も、次から次と、ころころとこころが移り変わっていく。

自分に都合のよいことならば、もっともっと欲しいと言い出しますし、いったん自分に都合が悪くなると、同じことでも手のひらを返したように、もう嫌だと、あっちへ行ってくれというふうになっ

てしまう。自分の都合によって、よしあしを言い立てる、それが私どもの日ごろのこころというものでしょう。親鸞聖人は、そうした私どものこころを、「自力のこころ」と教えられたことであります。

今、大変な状況の中で、そのことに便乗をして、何かよからぬことをいろいろ言う人もいるようです。おかしいと思ったら、警察や親しい人に相談しましょうと、こういうふうに呼びかけられていますけれども、難しいんですね。そもそもおかしいと思わせないのが詐欺の手口ですから、私どもは自分の都合がよければ、そうかそうかと飛びついていってしまう。そういうこころをもっておりますから、そういう意味では私どもはみんな詐欺の被害に遭う予備軍なのかもしれません。

愚こそ自由の砦（とりで）

『歎異抄』の第二章では、親鸞聖人はそうした私どもの自力のこころにまとわれたわが身の事実というものを淡々とお教えになります。そして、その煩悩具足のわが身をこそをたすけんがための、如来の本願のまことということを説いていかれます。

弥陀の本願まことにおわしまさば、釈尊の説教、虚言（きょごん）なるべからず。仏説まことにおわしまさば、善導の御釈、虚言したまうべからず。善導の御釈まことならば、法然のおおせそらごとならんや。法然のおおせまことならば、親鸞がもうすむね、またもって、むなしかるべからずそうろうか。

（『真宗聖典』六二七頁）

と、このように、私どもを助けんがための本願のまことを諄々（じゅんじゅん）と説き明かされ、それに続いて、「愚身の信心におきてはかくのごとし」と、念仏の信心を明確にきっぱりと言い切られるわけであります。

この「愚身の信心」は、愚かな身ということですが、愚直という言葉がありますね。「あの人は愚直な人だな」という言い方をします。そういう真っすぐなこころ、自分自身に真っすぐに向き合うこころの姿勢。「愚身の信心」とはそういうこころを申しているのだと思います。

法然上人の遺言であります『一枚起請文（いちまいきしょうもん）』に、

念仏を信ぜん人は、たとい一代の法を能（よ）く能く学すとも、一文不知（いちもんふち）の愚（ぐ）どんの身になして、尼入道の無智（むち）のともがらに同（おなじく）して、ちしゃ（智者）のふるまいをせずして、只一向（ただいっこう）に念仏すべし。

（『真宗聖典』九六二頁）

とあります。これは、法然上人のお亡くなりになる二日前の遺言の言葉です。親鸞聖人が「愚身の信心」とおっしゃるのも、この法然上人の遺言を何十年たってもしっかりとわが身に受けとめられた、

聖人の信心の言葉であろうと、このように思うんですね。

「これが私です。私はここにいます。いつでもどこでも、どういう私であっても、今ここに生かされている、この身、この私自身から、一歩一歩始めていきます」という、そういう本当に自分自身として生きる勇気、決意を表すのがこの「愚身の信心」、南無阿弥陀仏の一念のこころであると、このように言うことができようと思います。

最後にもう一度、児玉暁洋先生の言葉を紹介したいと思います。「愚こそ自由の砦」という言葉です。これはおそらく、敗戦後に毎田周一先生が「貧こそ独立の砦」とおっしゃったことを、児玉先生なりに受けとめ直して言われた言葉だと思います。先生が授業や講義の合間に、何気なくふとおっしゃった、こういう言葉が今も私の胸に響いていることであります。

群生海（ぐんじょうかい）

法話の動画はこちら→

教学研究所長　楠（くすのき）　信生（しんしょう）

五つの汚れ

まず、私が群生海ということを選んで題にさせていただきましたのは、あるご門徒のお宅の床の間に、この言葉が掛かっていたということに由来いたします。

「群生海」というお言葉は、親鸞聖人のお書きになられた「正信偈」に、「五濁悪時群生海　応信如来如実言」（『真宗聖典』二〇四頁）とあります。この「五濁悪時群生海　応信如来如実言」、その前にはご覧のように「如来所以興出世　唯説弥陀本願海」というお言葉がございますが。この本願海と、そして、群生海という親鸞聖人が大切になさったお言葉。先にこの群生海ということから、少々お話を申し上げたいと思うことでございます。

この二句のおこころは、お釈迦さまが亡くなられて長い年月がたった今、五種類の濁りの時代を生きる人間の迷いが深く広いことを、五濁悪時の群生海と、こういうふうにおっしゃいます。そして、

そのような時代を生きる人びとは如来のまことのお言葉を信ずるべきであるということになります。

この五つの汚れということは、一つはまず、時代の濁り。そして、思想の乱れ。そして、貪り（むさぼ）、瞋（いか）り、愚かなどの煩悩が盛んであること。そして、人間の資質が時とともに低下すること。五つ目は、人間としての精神が熟さずにいのちが終わってしまうこと。この五つを五濁と、こう教えられております。

いつ、念仏したらいいんですか

最初に申しました、ご門徒のお宅の床の間に掛けてあった、この群生海というお言葉。それは、そのお参りにお伺いしたご門徒のおばあちゃんがお書きになられたものを軸としたものでした。そのお宅は数年前にご門徒になられたお宅ですけれども、こちらに越してこられる前、そのおばあちゃんはよくお寺にお参りに行っていたというふうに聞かせていただきました。

実際、お参りに私がお伺いした時には、そのおばあちゃんはすでに入院しておられました。結局生前は会わずに終わったわけでございます。そして、そのおばあちゃんの一周忌の時、長男ご夫婦、次男ご夫婦、そして、長男さんの息子さんがお参りされていました。長男、次男と申しても、お二人ともすでに定年を迎えておられる方です。

その一周忌の法話では、群生海という言葉、親鸞聖人が非常に大切になさった言葉だということをお話しさせていただいたんですけれども、そのお勤めの後、お茶を頂いている時に、お念仏の話になりました。そこで弟さんがおっしゃるのです。「いつ、念仏したらいいんですか」と。こうお聞きになりましたので、私は、いつでもどこでも念仏申したらいいと思いますよと。こう申したところが、お兄さんがふとこういうことを話してくださいました。「ほれ、おまえが小さい時、悪いことをした時におじいさんが念仏をしていただろ」、こういうことを紹介してくださいました。

何かにつけてお念仏の声が出てくる、お念仏がそれこそ口からこぼれるようにして出てくる。こういう生活をしておられたおじいさんのことが、何かこう、温かく思い起こされることです。

私は、そのお宅にお参りにお伺いして、その床の間の群生海というおばあちゃんの字を見るたびに、生前お会いしたことはなかったのですけれども、何かおばあちゃんに出会える、そういう気持ちにさせていただいております。

ですから、その群生海という掛け軸の言葉をとおして、会ったことのないおばあちゃんが、今、長男さん、次男さん方とお念仏の話をさせていただく、そういう場をおばあちゃんがつくっていてくだ

さるのだなということを思うことでございます。

本願海と群生海

この「五濁悪時群生海」の前の、「如来所以興出世　唯説弥陀本願海」、これをとおしてお読みしますと。「如来、世に興出したまうゆえは、ただ弥陀本願海を説かんとなり。五濁悪時の群生海、如来如実の言を信ずべし」と、こういう流れになります。

この本願海ということ、これは、迷いの世界を現す群生海に対して、阿弥陀仏の本願の広大であることを大海にたとえて本願海と、このように説かれております。そして、今読ませていただきました、「如来所以興出世」のところの意味を確かめますと、「お釈迦さま、そして、諸仏がこの世に出られた本当の願いは、ひとえに全てのものを平等に救う、海のように広くて深い阿弥陀仏の本願を説くためであります」となります。

如来の開かれた世界である本願海と、私たちの深い迷いの世界である群生海とが、南無阿弥陀仏の六字のみ名によって、名号によって、深い人生の味わいを生む言葉であることを確かにいただくことができると思います。

今は世界中、新型コロナウイルス感染症のために人びとのこころは沈み、不安に陥っております。

その中で、失われた日常という言葉、そして、コロナウイルスに対しては見えない敵、また、新型コロナウイルスとの共存、いろいろな言葉が投げかけられて、みんなが必死になって、どう受けとめたらいいのかを考えております。

その中で今、本願海と、そして、群生海という、親鸞聖人が大切にされた言葉をとおして、本当に私たちが人間として取り戻すべき、取り戻さなければならない日常とは何なのかということを、あらためて教えの言葉にたずねていくことが、今この時大切でなかろうかということを思いつつ、お話を申し上げたことでございます。ありがとうございました。

苦悩と大悲

金沢教区浄秀寺前坊守　藤原（ふじはら）　千佳子（ちかこ）

法話の動画はこちら→

世間のものさしと「仏法の救い」のせかいとの違い

人は、生まれたら老い、病気になり、死する身として、おります。この「苦悩と大悲」は私の人生のテーマでもあります。「苦悩」と「大悲」と、二つ並んでいるようですが二つではありません。一つですね。我々の苦悩があるからこそ仏さまの大悲心がはたらいてくださるのです。

親鸞聖人の晩年のご書物に、『唯信鈔文意』があります。

「唯」は、ただこのことひとつという。ふたつならぶことをきらうことばなり。また「唯」は、ひとりというこころなり

（『真宗聖典』五四七頁）

とあります。

「ひとり」というと独りぼっちのようですが、そうではありません。誰とも代われない一人（いちにん）という意味ですね。我々は身は一人でありながら思いは二つ並べます。これを相対といいます。善いか悪いか、損か得か、好きか嫌いか。そういう相対のものさし、分別で生きております。でも、その世間的なものさしだけでは救いがありません。その分別を破るようにして、われ呼ぶ声として、亡き人からも、また気がつかないけれど自分自身からも呼ばれております。

どうですか。生まれてよかったですか。「ここまでいのちいただいてようこそでした。いろいろ苦労はあったけれど本当に尊い人生でございました」。最期、「生まれてよかった。お念仏に出遇えてよかった。私は私でよかった」といえるものに出遇え、出遇えという呼びかけが私自身のいのちの願いとしてあるのです。出遇いたいのですね。これを「法蔵魂」といいます。

先ほど、相対のものさしと申しましたが、その中に幸・不幸があります。世間のものさしでは、幸せな人を我々はどういうでしょうか。家も立派、財産もある、お仕事もうまくいっている、みんな元気。そういう方を「幸せな人だね」といいます。

でも、そういう人がいるということは、必ずそうでない方がおられますね。愛しい人とは別れる、仕事はうまくいかない、病気にはなる。そういうマイナスの条件の多い人を我々は、「不幸な人だね」といいますね。幸・不幸が両極にあります。

でも、私はご縁があっていろんな方に出会わせていただきます。そうすると、そんな中に、「本当

にいろんな苦労に遭って厳しい人生だったけど、今思うとあのことがあったればこそ、本当に今この身をいただいております。本当に幸せ者です」と言う方にお会いします。両極ではなく表と裏のせかいです。ここが、世間のものさしと「仏法の救い」のせかいとの大きな違いですね。

「これも運命だと思って諦めて」、というと、それは暗いです。でも、仏法は暗くないのです。明るいのです。明るい方向へ転じてくださる。転ずるせかいですね。方向が変わるのです。事実が変わるのと違います。でも私自身に方向を変える力はないのです。なぜかというと、私の日ごろのこころがけとか努力とかが、いざという時、間に合わないからです。

方向が転じられる

私の父、正遠にこんな言葉があります。「わからんから南無阿弥陀仏。助けがないから南無阿弥陀仏。親も子も間に合わぬから南無阿弥陀仏。この身体もこころも間に合わぬから南無阿弥陀仏。南無阿弥陀仏も間に合わぬから南無阿弥陀仏」。

何にも間に合わないお手上げのところにご回向の南無阿弥陀仏の呼びかけをいただくと、不思議に方向が変わるのですね。現実が変わるのではないのです。我々は幸せを求めております。悲しいことに出遭わないように、苦しいことに出遭わないようにと願っております。

宗教のほとんどが向こうに対象があって、病気にならないように、ひどい目に遭わないように、仕事がうまくいきますようにと、こちらから願いがけをしますね。でも、親鸞聖人の教えをいただくと方向が反対です。真実の方からこの我々に呼びかけてくださいます。

お念仏申していても病気になる時はなる。でもその時、ご縁があって病気になったらその病気の身を生きよと、この私一人の身の事実にまで呼びかけてくださる。「厳しいですね。でも代われないよ、そこで生きよ」と呼びかけてくださる。仏さまは十方衆生よと、生きとし生きる者に呼びかけてくださっておりますが、「はい」とうなずくのは私一人ですね。

金沢に私よりだいぶお若い友人がおります。彼女は結婚して、なかなかお子さまに恵まれなかったのですが、女の子を授かりました。ところがお医者さんから、「お子さんは少し心臓に障がいがありますね。これからは何度も手術をしないとね」と言われました。彼女はひどいショックを受けまして、しばらくはとても悲しくて暗い顔をしておりました。

しばらくして出会ったらとても明るいのです。「明るくなられたわね」と言いましたら、彼女はこう言いました。「藤原さん、悲しみの底が抜けたのです」。この言葉は重かったですね。そうですね。

悲しまなかったわけではないのです。悲しんで悲しんで、そして底が抜けた。底は抜けっぱなしじゃなくて、必ず彼女は受けとめるものに出遇われたと思います。

彼女はこう言いました。「初めは、元気な他の子と比較しました。二歳ぐらいになるとみんな走っている。それに比べてこの子は、と思っては落ち込んでいました。でも、何度かの手術に耐えて、生きよう、生きようとしているわが子を見た時、ある日思いました。もう他の子と比較するのはやめよう。今日この子はいのちがある。この子を抱っこしている私にもいのちがある。この今日という日は尊いかけがえのない宝のような日です。なんでこんななのかという暗い日にはしたくない。そう思ったら、今日見るお花も沈む夕日もなんと輝いて見えたことでしょう。藤原さん、道が開けたのです。そしたらね、なんて今まで暗くて狭いところにいたのかなって初めて気づかされた」。そうおっしゃいました。光に遇われたのでしょう。

今、彼女は同じようなお子さんを持たれているお母さん方といろんなサークル活動をして笑顔で生きておられます。それなら、おかれた状況が変わったのか。いや、事実は変わらないのです。方向が転じられたのですね。そういうはたらきが仏法にはあるということを思います。

拳足一歩（こぶくいっぽ）のおはたらき

みんな悲しみをもって生きています。それがなくなって明るくなるのではないのですね。身の事実のままに南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏と歩ませていただく。そこに不思議と、という世界があります。これは仏法不思議というので、世の中のマジックショーのようなああいう不思議ではないのです。「おはたらき」です。おはたらきは目に見えません。風のようですね。目に見えないけど吹かれてみると、ああ、風が吹いているなと感じます。他の人が吹かれても駄目です。私自身が吹かれてみると、ああ、いい風だなと感じるのです。それがおはたらきだと思います。

「満足大悲」というお言葉があります。仏さまの願いが満足する。私の願いが満足するのではないのですね。どこに満足するか。私の苦悩のこの身の事実に満足してくださるのです。

親鸞聖人のご和讃があります。

如来の作願をたずぬれば　苦悩の有情をすてずして
回向を首としたまいて　大悲心をば成就せり

（『真宗聖典』五〇三頁）

我々一人ひとりの苦悩を縁として、仏さまの大悲心が成就してくださるのです。

以前、結婚披露宴である先生が若い二人に、「生活しながら念仏申すのではなく、念仏申しながら

生活してください」とメッセージされた言葉が心に残っております。しかし、我々は普段「日ごろのこころ」で、相対のものさしで生きております。いつもいつも仏さまの大悲に背いてばかりです。

でも、行き詰まったり、どうにも間に合わなくなった時、不思議とすでに届いてくださっている南無阿弥陀仏のお念仏のおはたらきが、ほんの一瞬ではあるけれど私にはたらいてくださるのです。

そして、そのご縁のままに、不思議とその場に立ち上がらせていただき、一歩歩むことができる。そういうおはたらきを「挙足一歩」と申します。自坊の梵鐘に祖父鉄乗がこの文字を書いております。

挙足一歩というと元気で歩むようですが、ご縁で、病気で病院のベッドにいて、ここで生きる、と決まれば、病院のベッドが挙足一歩です。一人ひとりの業縁のままにそこで歩みを賜る。そのことが大変幸せだなと思っております。

今、新型コロナウイルスの感染拡大で隣県の友達とも会えない、病院に入っている家族とも会えない、最期を看取ってあげることもできない。そういう孤立を強いられておりますと、今まで当たり前だったことがなんと尊いご縁だったかなと、しみじみこのごろ思っております。

今こそ私たちは経済優先のこれまでの価値観を問い直す生き方を求められている、問題提起されていると思います。

こんな時こそ私たちは仏さまの呼びかけに耳を傾け、仏法聴聞のご縁を頂き、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏と苦悩の身のままに歩ませていただきたいと思っております。どうもありがとうございました。

〝我欲手伝う仏〟在さず

同朋大学名誉教授　池田　勇諦

法話の動画はこちら→

本当の信仰の始まり

もう亡くなられて二十年ほどになりますが、高名なクリスチャンの作家であられた遠藤周作さんのことです。もちろん多くの作品・書物を残しておられます。その中では極めて小部と言いますか、小さなものなんですけれども、周作氏があちらこちらと招聘されて、講演に行かれた、その先々で質問を受けられて、それに答えられたものをいくつか集められて、一冊の本になさった。その書名は『私にとって神とは』というものです。

ずいぶん前でありますが、発刊されて以来、版を重ねて現在に至っておりますから、多くの方に読まれていると思います。その中の一節です。要を取って申しますと、こういうことです。

私に子どもがいたとする。その子どもが癌にかかったとする。すると私は昼夜の別なく、親として真剣に、天にまします父なる神に祈るでありましょう。どうか子どもの病を治してくださいと。しかし、そのかいもなく子どもは亡くなる。すると私は、きっと周囲の目もはばからず泣き叫ぶだろうと思います。あれほど祈ったじゃないか。何の奇跡も起こらなかったじゃないか。神も仏もあるものか。皆さん、本当の信仰というのはそこから始まるものではないでしょうか。

そういう内容なんですね。特にこの最後の一言ですね。神も仏もあるものかとなげたところ、そこから本当の信仰は始まるのではないかという指摘ですね。これこそは、現在、新型コロナウイルス感染症の拡大で恐怖と不安にさらされている私たちでありますが、それだけに今、私たちが自分に一度問わなきゃならない一点を、何か今の言葉は示唆してくださっているように思えてならないのです。

もちろん仏教とキリスト教は異なります。けれど、人間としての真実の生き方を問い、学ぶという姿勢である限り、どこかで一点重なるものがあるということを私は強く感じるわけです。だから、今もこれを冒頭に申し上げるわけであります。

私たちのすがた

さあ、そこで私たちですが。日ごろ、お互いに仏法のご縁をいただいて、聞かせていただいているのですが、それは何かというと、「〝我欲手伝う仏〟在さず」。南無阿弥陀仏という仏は、決して私の

我欲の後押しをする仏ではないということ。それを散々聞かされているわけですよ。

そして、そうだと、そこが一番大事なところだと頷きもしているのですけれども、ひとたび逆風に襲われると、たちまちに自我のこころは、その南無阿弥陀仏の仏までも、我欲手伝う仏に仕立てかえて、期待と要求を突きつけてゆく。そういう関わり方しかできない自分なのではないか。その点、皆さん方、今はいかがですか。

そこからすると私たちは現在、いろいろな神々、多くの仏方に、どれほど多くの祈りを捧げていることでしょうかね。もちろんそれがよいとか悪いとかという話ではありません。それが私たちの実相というか、問題であるということをしっかりと見つめていくということを、私たちは忘れてはいけないのではないかと思うわけです。

本当の私になってくださるもの

ではですね、「〝我欲手伝う仏〟在さず」ということは、どういうことなんでしょうか。端的に言いますと、信ずる対象として自分の前に見ている、立てている仏が、実は信ずる主体であったということの驚きの言葉ではないかと。そう申したいわけです。

私たちが我欲を手伝う仏を妄想する限りは、仏は常に信ずる対象で、自分の前に立てます。そして期待と要求を突きつけていく対象でしかないわけですね。

ところが、そういうあり方であります限りは、そこにおいて我欲が何ら満たされないということになれば、それこそ神も仏もあるものかと、ぽい捨てで終わってしまいます。

真実の仏というのはですね、私がものを見る、聞く、考える、行動する。その主体になってくださるものなんですね。つまり見る、聞く、考える、行動する。その感覚、智慧となってはたらいてくださるもの。だからその意味では、本当の私になってくださるもの。それがまことの仏でしょう。だからですね、私たちはそのまことの仏に気づかされると、初めて必然の現前の境遇と向き合っていく。それを乗り越えていく努力が始まるということではないでしょうか。

ところで、その始まった歩みというのは、決して喜びの日暮らしとかいうような、そういうきれい事ではありません。むしろ我欲の、自我の、妄念、妄想に振り回されていくような毎日でしかない、そういう自分がいよいよ何か見えてくるというか、問題になってくる。

しかし、そういう自分だから、もう自分は駄目なんだということではなくて、そういう自分だからこそ、いよいよ聞き直していかねばならんのだと立ち上がる。挙足一歩（こそくいっぽ）する。そのことですね。

法蔵魂に生きる

その点で、ある人が年頭状にくださった手紙の中に記されていた言葉が、とても私は同心させられるわけです。こういう言葉です。「はからいの　すたらぬままに　年が過ぎ」。一年が済んだと。「はからいのすたらぬこの身のままで年が発つ」。また新しい年が始まると。そして「はからいの　こころは常に変わらねど　はからいの　すたらぬわれをこそ聞く歩み」。

この一言の押さえですね。「はからいのすたらぬ　このわれをこそ聞く歩み」。本当にそれしかない。ですから、ここにあらためて私は念を押したいんです。まことの仏は、南無阿弥陀仏という仏は、私の信ずる対象ではなくて、信ずる主体となる仏なのです。ですから、何が人間を本当に人間らしく生きさせるものか。何が反対に人間を非人間化していくものであるのか。それを見極めていく感覚、智慧。智慧としてはたらく仏です。

『正像末和讃』の中にこの一首がありますね。

智慧の念仏うることは　法蔵願力のなせるなり
信心の智慧なかりせば　いかでか涅槃をさとらまし　（『真宗聖典』五〇三頁）

信ずる対象でなくて、信ずる主体となった仏。それを法蔵菩薩と申し上げるわけであります。ですから皆さん方も、「法蔵魂」という言葉をお聞きになっていると思うんですけれども、それなんですよ。法蔵魂に生きる。そこに人間の本当の確かな生き方があるということを教えられているわけです。

今回のこの大きな逆風に遭った私たちですが、だからこそ、いよいよまことの仏に出遇い直していく、それは貴重なご縁をいただいたということが言えるのではないでしょうか。自分が特に一点申し上げたいことはそこなのであります。ありがとうございました。

大谷祖廟暁天講座（二〇二〇年八月一日）

世人（せにん）、実（まこと）に爾（しか）なり

大谷大学教授　一楽（いちらく）　真（まこと）

法話の動画はこちら→

足を止めて考える

今年は、新型コロナウイルス感染症拡大ということで、いろいろな行事ができなくなっております。私も日ごろ大学におりますが、今年の大学生は入学式すらなくて、その前の高校を出る時の卒業式もできなかったという。今年の高校生・中学生は修学旅行もないという、そのようなことで、本当に楽しいはずの学校生活が何とも言えないような状況になっているわけであります。

しかし、そのような中でも「なるほどな」と思うのは、それぞれの人生について、足を止めて考えるということになっているということ。これはまた大事な機会だということも思います。してきたことができなくなったという点では、なんでこんな目にと思うわけですが、逆に言えば、やっぱり私たちが生きていることを全体的に見つめ返す、そういう機会になっているともいえます。

つまり、仏法をとおして、仏さまならどうおっしゃるか、あるいは親鸞聖人ならどうおっしゃるかということで、我々の今を見つめ返すとともに、これからのことを確かめる、そういう時期であろうかと思います。

そうしますと、世の中ではコロナの禍（わざわい）という、コロナ禍という言葉が飛び交っているわけですが、これは仏教で言えば、禍だというふうに一方的には決めつけられないわけです。確かに人間にとっては、今までできたことができなくなったということで、「コロナのせいで」と言いたくなることがいっぱいあるわけです。しかし私たちは初めからそういう中を生きていたということ。これを日頃は見ずに済ませていたということがあらためて問われたという意味では、コロナは単に禍ではないわけですね。コロナ禍という言い方をすると、それ自体が、何か我々は一方的なコロナウイルスの被害者のようなことになりますけれども、実は、そもそも我々はこういう世界の中に初めからあったということ。これをあらためて突きつけられているということであります。そのあたりのことも後でお話しできればと思っております。

仏の説法はどこにあるのか

今日は「世人実に爾なり」（『真宗聖典』六三頁）という、『仏説無量寿経』（『大無量寿経』以下『大

経』）の下巻に出てきますお言葉を講題として出させていただきました。「世人実に爾なり」ですから、「世の人はまことにそうであります」ということを、弥勒菩薩がお釈迦さまに対して申し上げている。そういうお言葉であります。

これはお釈迦さまが、この世の中のあり方、これを本当に諄々と、本当にこんこんと説いてくださるわけですが、それを聞いた弥勒が、本当にそのとおりでありますということを申し上げる。こういう場面でのお言葉なのですね。

まず大事な点は、仏の説法はどこにあるのかということです。仏の説法というと、説いた方のものと思いますが、実は聞いた人の上にあるのです。お釈迦さまがいくら大切なことをおっしゃられても、「ふうん、そんなものですか」というふうになってしまえば、お話は全部通り過ぎていきますね。聞いたことになりません。聞いたということは、「本当にそのとおりですね」といただいた人の上にあるわけであります。

その意味で、お釈迦さまの説法は初めから大事なことをずっと繰り返しおっしゃってくださっていると思いますが、それは二千五百年前の昔も、現代であっても、それを聞いた人のところにあるということ。これをまず今日は一点申し上げたいところなのですね。

ですから説法というのは、お釈迦さまがずらずらと言葉を並べられた、そういうことが書かれている、まとめられているのではなくて、確かにそのとおりですというふうに受けとめた人があるということ。ここにおいて仏法は私たちのところにまで伝えられてきたわけであります。

それぞれの「現代」

先ほどのご挨拶に蓮如上人のお言葉が出ましたが、蓮如上人は約五百五十年前を生きられた方ですね。親鸞聖人は八百年前を生きられた、そういう方々であります。我々からすれば、昔の人と言いますが、それぞれの現代を生きておられたわけです。その時々、問題の表れ方は違うかもしれません。しかしながら、その現代の中をどう生きようか、何を大事にということを我々に先だって考え、あるいは求められた、そういう方々が、このお言葉が大事ですよと、仏のお言葉、如来のお言葉を伝えてくださったわけです。

人間の世界も今回のことで言えば、みんな一生懸命でありますけれども、誰の言うことが本当に当てになるのかということがはっきりしないですね。特に、まだウイルスの正体がわからない、あるいはワクチンや特効薬が開発されていないという状況では、何が本当なのかわからないわけです。

例えば、流行し始めたころは、温かいお湯を飲んでおけば大丈夫だという、そんな話まであったわけでしょう。若い人はかからないという話もあった。でもそうではなかった。今度は逆に、かかっても、何か既往症がある人以外は重症化しないということも見えてきた。案外致死率は低いかもしれないということが言われてきた。でもこれはまだ全部途上であります。高をくくって、だから大丈夫だという話ではありませんが、何もわからない、当てになることが一つもないわけです。

でも私たちの傾向は、その中で誰の言うことなら当てになるのだと。この人の言うことなら間違いないかもと、何かを握ろうとしますよね。その握ったことで、実は裏切られてきたというか、これが当てになるということを当てにしようとしたことが、実は当てが外れる。当てにするということがだいたいそうなのですね。外れるものなのですよ。

それで「こんなはずではなかった」となりますが、実は当てになるものなどどこにもないということ。確かな答えなどないということを突きつけられるのが、この現実の問題であります。

生死無常の道理

その意味で言うと、親鸞聖人も八百年前の現代に疫病で、あるいは自然災害でばたばたと人が亡くなられるという、そういう状況をくぐっておられますね。有名なところでは、八十八歳のお手紙が残っています。去年から今年にかけて本当にたくさんの人が、老少男女を問わず亡くなっていく。これは悲しいことでありますというお言葉から始まるお手紙です。

なによりも、こぞことし、老少男女（なんにょ）おおくのひとびとのし（死）にあい（合）て候うらんことこそ、あわれにそうらえ。ただし、生死（しょうじ）無常（むじょう）のことわり、くわしく如来のときおかせおわしましてそうろうううえは、おどろきおぼしめすべからずそうろう。

（『真宗聖典』六〇三頁）

ただし、生死無常のことわり。つまり、いつ何時いのちは終わるかもわからないということ、これは、道理、いのちの事実であって、そもそも詳しく如来が初めから教えてくださっていますと。だから病気になったり、災害に遭ったりして亡くなって、こんなはずではなかったというふうに私たちは驚きますが、実は生まれたということ、生きているということ自体がそういういのちの事実をもっているのですよという。これは如来さまの教えでありますということです。

まあ、ちょっと聞くと冷たい言葉のように聞こえるかもしれませんね。生まれた者は死ぬのだと言っているわけです。おまえも間違いなく死んでいくのだと。でもそこは冷たく突っぱねるわけではなくて、その事実に立って、明日終わるかもわからない。もっと言えば今日終わっていくかもしれな

い。そのいのちをどうあなたは輝かせますか。いのちを尽くしていきますかという、この大事さを呼びかけてくださっているお手紙であります。

この現代に、今回の病気のことを誰かの祟りだと、そんなことをおっしゃる人はありません。しかしながらおはらいをするという、こういう発想はないわけではないですね。でも親鸞聖人はそうではなかったということを申し上げたいわけです。

誰かや何かのせいでこうなっているということではなくて、生まれてきたということは病気にもなるし、思わぬことにも遭わなければならない。その事実にしっかり目を覚まして、あとの残された人生をどう生きるのか、あるいはどんな者としていのちを終えていくか、次の代に何を託していくかということが大事なのであって、誰かのせいにすることで、この問題は何の解決にもならないということを教えてくださっていると思います。

親鸞聖人が如来の教えだとおっしゃる、その教えをどこにおいて見られたかというと、このいのちの道理に見られました。我々のいのちの事実をあらためて教えてくださったのです。そしてご自身もこの道理を見ておられるわけであります。

逆に言えば、私たちはいのちを頂戴しておりながら、どこを見ておりますでしょうか。例えば元気で体が動くという、これが私だということになれば、病気になった自分は許せないかもしれません。前のように動かなくなった自分は価値がないというふうに決めつけてしまうかもしれません。

それが間違いないと思い込んでいるわけですが、実はその自分のものの見方。自分が握っている、こうであるはずだというふうに決めつけていること。これ自体が怪しいのではないかということを如来さまは教えてくださっているというふうに受けとめられたわけです。

ですから、我々のものの見方ではなくて、如来のまなこをいただいていきましょう。如来がどう教えてくださるかということを生きる中心にしましょうということを呼びかけてくださった。繰り返しますが、八百年前の天変地異の中で出されたお手紙一つを取っても、そういうことが言えるわけであります。

如来の仕事と衆生の仕事

さらにさかのぼって、二千五百年前のお釈迦さま。これは国も違います。民族も違うでしょう。しかしながら、二千五百年前のインドであっても人間が自分中心のものの見方に立っていくということはほとんど変わらないのです。その中で、これがいい、これが悪いといって私たちは生きているわけですが、その全体を問い返してくださったのが『大経』の下巻に出てくるお言葉であります。

『大経』の下巻は大きくは「悲化段」というふうに名付けられております。これは善導大師が「悲化を顕通す」（『真宗聖典』三二一頁）と、悲化を表すというふうにおっしゃってくださった言葉がもとで、大悲による教化という意味ですね。大悲、つまり、大いなる悲しみをもって、我々のあり方を変えていこうとする。そのままでいいのかと。さっき申し上げた、自分中心のものの見方で決めつけたり、価値があるか・ないかというふうに測ったり、そういうあり方を続けていいのかということを教えてくださる。それが下巻の全体であります。

これもちょっと挟んでおきますが、『大経』は上巻と下巻に分かれておりまして、これは分量が多いから二つに分けたのではないということを、いろいろな先生がおっしゃってくださっています。分厚いから二冊にしておけという、そういう話ではないというのですね。

上巻は法蔵菩薩。これは阿弥陀如来になっていかれますが、法蔵菩薩がなぜ浄土をお建てにならなければならなかったのか。その根本問題と、そして出来上がった浄土について語ってくださっている。言わば「如来浄土の巻」であります。これを「如来の巻」とおっしゃってくださった先生もあります。如来のお仕事が書かれているのですね。

それに対して下巻には衆生の仕事が説かれます。如来の浄土はすでにあるぞと。この浄土に生まれるのか。それとも、この世間にとどまって、勝ったか負けたか、得か損かということを続けるのか。どっちだということを迫ってくる。これが下巻の呼びかけであります。

ですから如来の浄土に生まれていくということがすっと行けば、下巻は要らないのですよ。しかし阿弥陀の浄土がありますよといくら言われても、行く気にならない我々がいるわけです。そんなところがなくても大丈夫だと思っている我々がいる。そういう我々に対して、この世がどれほど痛ましいかということを、お釈迦さまが大悲をもって教えてくださる。これが下巻であります。

そういう意味で、「如来の巻」と「衆生の巻」というふうにおっしゃって、上巻は如来のお仕事。下巻は、その浄土に生まれていくかどうかは一人ひとりの、これは衆生の責任だということまでおっしゃってくださった先生もありますね。大事な先人の受けとめだと思います。

三毒五悪

その中を読んでいくと、貪欲（とんよく）・瞋恚（しんに）・愚痴（ぐち）の三毒の煩悩が語られます。この三毒によってどんな痛ましいことになっているかということが書かれています。さらにその後には、第一の悪から第五の悪までが説かれます。殺生（せっしょう）・偸盗（ちゅうとう）・邪淫（じゃいん）・妄語（もうご）。そして飲酒（おんじゅ）。この五つに関する戒を破るあり方。こ

れがどれほど痛ましいかということが書かれております。この中身については、今日はとてもふれられませんが、ここまで説いてあるかというぐらい続いているのですね。

残念ながら、今、『大経』の下巻を詳しく読誦するということがなかなかありません。『大経』全巻を音読しようとしますと、早い人でも一時間半ぐらいかかるでしょうか。私なんか二時間は絶対にかかりますね。そういうこともあって、ご法事なんかでは『大経』が上がることがまず少なくなってきました。そして昭和三十年代に、法話を大事にしましょう、お経はちょっと短めにということで、昭和法要式が定められました。今、私たちが読んでいる『大経』は抜粋であります。だから下巻の、この三毒五悪段の箇所は抜かれたかたちで読んでおります。ともかく、下巻は、まだ浄土に生まれようとしないのか、まだこの世間にとどまるのかという、お釈迦さまの説法がこれでもかと続いているのですね。

私は学生とお経を一緒に読む、そういう輪読会という時間をもったりもしています。ある時、やっぱりお経ってすごいなと思いました。若い学生さんですが、輪読を一緒にしておりまして、「なんでお釈迦さまは僕のことを知っているのですか」と言うのです。つまり自分にありありと届いたのでしょうね。書いてあることは自分のことだと。僕のことだというふうに届いた。すごいなと思いました。漢字が並んでいるだけですよ。ところがその言葉が、僕のことを見てきたように書いてあるというふうに言われた。さっき申し上げましたが、受けとめたところに教えはあるということが、今でも起こるのです。説法そのものは二千五百年前のお釈迦さまと弥勒菩薩の間のお話であります。しかしそれが今響けば、二千五百年後の我々にとっても大事な教えとして頂戴することができるということを、目の前の学生さんが証明してくださったということを感じますね。

そこに出てくるお言葉の一節が、今日の「世人実に爾なり」という、この教えを受けた弥勒菩薩のお言葉であります。

少しだけ三毒段の中身にふれておきたいと思います。貪欲・瞋恚・愚痴を三毒の煩悩といいます。毒というのは文字どおり、自分も毒されていくだけではなくて、人も毒していくのです。お互いに傷つけ合うようなことになっていく。これを仏教は痛ましいというふうに呼びかけているわけであります。

貪欲

ただ、私たちは日ごろ、煩悩にふり回されていても、それを痛ましいとすら思いません。世の中全部がそうなっていると、なおさらですね。勝ったか負けたか、得か損か。それは当たり前ではないかと言うかもしれません。やられたらやり返せ、倍返しだと。けれども、倍返ししてそれで終わりじゃ

ないですよね。また返ってくるということがあるでしょう。

そういうことを延々と繰り返していくような、こういう営みを我々はおかしいと思っていない。やられてやられっぱなしだったら、やられ損だという話ですよ。だからやられたらやり返すのは当たり前だと言うのでしょう。でも、そういう生き方が痛ましいのではないかということをお経は呼びかけてくださるのです。

だから、この貪欲・瞋恚・愚痴という三毒について、我々は日ごろ、問題とも思っていないのです。例えば貪欲というのは、もっともっとというこころですね。いろいろなものを手に入れても、さらにもっとと。我々の生活は本当に便利で豊かになったと思います。しかし、もっと便利に、もっと豊かにということを言い続けているわけです。

もうちょっとすると、例えば車は運転しなくてもいいようになるのかもしれません。でも、それは車を運転するのが好きな人にとっては、なんという時代だとなるかもしれませんね。いいか悪いかわかりませんが、あれは人間は信用できないから、車の自動運転で事故が起きないようにというのが、今、自動車会社が一生懸命開発しようとしていることですが、果たして本当に要るのかどうか。

例えば医療技術もそうですね。ものすごい速度で医療技術は進化してきました。でも、もしかして

ですよ。細胞を取っ替えたり引っ替えたりできるようになったりしたら、我々は死ねなくなるかもしれません。これは死を恐れてきた人間にとっては、本当に明るいニュースに見えるかもしれませんが、本当に死ねない人生、どうでしょうか。来年で三百歳ですとか、そういう人生というのはどうなのでしょう。

ちょっと皮肉めいて申し上げましたけれども、我々が日ごろ求めている、便利で、豊かに、もっともっと、というのは、本当は我々にとっては喜びではないのかもしれないですね。けれども日ごろは、いや、もっと便利に、もっと豊かにとやってきた。それが今問われているわけです。冒頭に申しました、以前のようにできないという問題ですね。それを今、さらにこの貪りを膨らませますかと。まだその生き方を続けますかというのが、お釈迦さまからの説法なのですね。

不要不急のこと

もうひとつお言葉を紹介します。三毒段のはじめには、「世人、薄俗（はくぞく）にして共に不急の事（じ）を諍（あらそ）う」（『真宗聖典』五八頁）と書いてあります。世の中の人は薄っぺらい、表面だけで物事を判断している。世俗の価値観にとらわれてしまって、そして急がなくてもいいこと、不急の事を争っていると書いて

あるのです。これも不要不急の外出は控えましょうということで、不要不急という言葉がこれほど飛び交っている時はないかと思いますが。

先月でしたかね、解剖学者の養老孟司先生が、人生というのはだいたい不要不急だという、そういう記事を書いておられましたね。本当に急がなくてはいけないこと、本当に重要なことってあるのだろうかと。自分の場合は、かつての学園紛争の中で、あなたがやっている研究は何の役に立つのだと言われた。だって自分がやっていることは解剖学ですから、亡くなった人の体を切り刻んで、そして細胞の役割を確かめたりしているわけです。そういう基礎研究は後にもちろん役に立つわけですが、目の前のこと、今、苦しんでいる人間にとって何の意味があるのかと言われたら、ああ、自分のやっている研究は全部不要不急かもしれないと。こういうことをかつても考えておられたと言うのですね。でもそんなことを言われたら、我々はどうでしょうか。本当に急がないといけないことって何なのか。本当に重要なことって何なのかとなったら、不要不急ばかりかもしれません。

しかし、どうでしょう。贅沢に見える芸術の世界。これは不要不急なのでしょうか。我々はご飯を食べられたらそれでいいというわけにはいかないですね。やっぱり、音楽が一節鳴るだけでも違う。あるいは絵を見るだけでも「あっ」と、大事なことを取り戻すことがある。そんなものは贅沢品だと、そんな話になりますでしょうか。だから何が不要不急かということもあらためて問われているわけです。

この貪欲のところでは、お互いに目の前のこと、すぐに結果が出ること、あるいは経済的なもうけにつながること、それがいいことのように言われている。しかしそれは本当か、ということを問うかたちで、貪りに覆われている我々の生き方を言わんとするお言葉なのですね。

瞋恚

次に、瞋恚。これは怒りのこころです。「正信偈」では「貪愛瞋憎之雲霧」（『真宗聖典』二〇四頁）と、初めの貪欲は貪愛（とんない）と言われますね。貪り、愛着。そして瞋恚は瞋憎（しんぞう）と示されるように、怒り、憎しみとも言われます。お互いが憎しみ合って生きている。本当は助け合ったり、敬い合ったりして生きられたら、どれほどこの世界、この人間関係というのは麗（うるわ）しいかわからない。しかし、結局全部が敵みたいになっていくわけです。

今回のことでもそうですよね。東京で流行したとなったら、東京の人は来てくれるなみたいなことになる。あるいはお世話になっている医療関係者に対しても、お宅の子どもは預かれませんと保育園で言われたり。感謝して当然なのに。病気に対する怖さというのが、結局遠ざけるということにな

る。本当はお互いに協力し合わないといけないのです。ところが、いがみ合ったり、排除するようなことになっていく。これが怒り、憎しみのこころ。瞋恚の痛ましいあり方なのですね。

でもそれをおかしいとはやっぱり思わない。自分を守るためには当然だということになる。これも言い方を気をつけないといけないことですが。何か、病気になっても構わないという話をして帰ったみたいになりそうですが、かからないように気をつけていただきたいし、人にうつさない。そのこともちろん大事であります。

しかし、もはやその段階を超えて、どれほど気をつけていても、罹患する場合があるわけでしょう。ニュースではいつも若者が飲み屋で感染を広めているみたいな、そんなことばかり言われますが、経路がわからない人が半数以上いるわけですよ。手洗い、うがい、マスクと、どれだけ気をつけていても、なる場合もある。そうなったら、なった人をばい菌のように扱う話じゃなくて、みんな苦しんでいる。そこをどう協力し合って、支え合っていくかということが大事なはずなのに、自分さえよければというこころが、邪魔者を排除するようなことになっていく。

もう一度言いますが、これはお釈迦さまが言っておられる人間の姿なのですよ。昔からそうです。

ここにはまたすごい言葉があります。「今世の恨みの意、微し相憎嫉すれば」（『真宗聖典』五九頁）

という言葉が出てきます。今の世で少しだけ、ちょっとだけでも憎しみ合ったり、ねたんだりしたら、それが次の世にはもっともっと激しくなると書いてあります。「転た劇しく大怨と成る」（同前）と。大きな恨みになると書いてあります。

これも学生さんと読んでいて、これは来世の話ですかと言われましたけれども、私らはいないかもしれません。私のいのちは終わったところで、もうこの世の問題にお別れをするかもしれませんが、私のつくった恨みは次の代、あるいはその次の代にも残っていくぞということをおっしゃっている言葉だとすると、これはまさに人間の歴史を言い当てていると思いますね。民族の業というふうに教えてくださった先生もあります。

本当に民族同士が恨み合って、この恨みを忘れてはならんと言って、次の世代、次の世代といって、何千年もいがみ合ってきている。そういう生き方があるわけでしょう。だから私はいなくなるかもしれませんが、私のつくった恨みが、わが子やら、わが周りの友達らに伝わっていくということがある。これは終わりがないぞという痛ましさを呼びかけているんですね。

ですから、やられたらやり返せ、これは当たり前ではないかと言われるかもしれませんが、その生き方が終わりのないような憎しみを増産し続けていくという、その言葉がここにも出てまいります。

愚痴

そして最後の愚痴。これは無明とも言われますし、無明に基づくものの見方は邪見という言葉でも言われます。一生懸命生きているつもりかもしれないが、結局何をしているかといったら、「吉凶禍福、競いておのおのこれを作す」（『真宗聖典』六一頁）と書いてあります。

吉というのはいいことですね。凶とはよくないこと。まあ、おみくじというのは若い人にも本当にはやりますが、吉が出れば喜び、凶が出たら「ああっ」というわけです。でも大したもので、一方では大凶が出ると「これより下はないから、あとは上るだけだ」と言っているのも聞いたことがあります。でも、吉と凶というのはいまだに、若い人にもすんなりと伝わっている言葉ですね。

そして禍福。これがさっき申し上げた、コロナ禍と言われる時の禍という字です。福というのは自分にとっての幸福です。だから求めるのは吉と福を求め、凶と禍の方、よくないことはなるべく避けるという。これが私たちの基本的な生き方になっているということを、お釈迦さまはおっしゃっているわけです。

言われたらそうですよね、やっぱり。都合のいいことは大好きです。都合の悪いことには遭いたくないです。人でもそうです。自分にとって好きな人と会いたい。嫌いな人とは一緒に仕事をしたくない。こういうことがあるわけです。いつもそれを基準に生きている。でもそれを誰かのせいだと思っているのですね。

これはうちのお寺の定例法話に来てくださったある方が、だいぶ前にですけれど、おっしゃってくださいました。会社でどうしても一緒に仕事をしたくないと思った人がいて、その人がついに転勤になったというのですね。「やった」と思ったそうです。ところが、その思いは長くは続きませんでしたと言うのですね。周りの人が、また戻ってこられたのですかと聞いたら、違いますと。次に気に入らない人が出てきましたと。こういう話をしておられました。つまり、邪魔者がいたのではありませんと。邪魔者をつくる私がいたのですと。こういう話を座談会でしてくださいました。本当だなと思いました。

つまり一番気に入らない人がいる時には、二番手、三番手は目に入らないだけですね。それで一番気に入らない人がいなくなったら、こいつも気に入らない。こいつも嫌だとなる。二番手、三番手がわっと顔をもたげてきたという、こういうお話をしてくださったわけです。結局、邪魔者をつくり続けている私。これが問題だったのですねとなった時に、その方は仏法を聞かねばならんと定まったという話をしてくださったわけです。

でも、それはなかなか日頃は問題にならない。気に入らない人は排除する方向で生きているわけです。でもこれは全てそうではないでしょうか。吉と福だけ求めて、凶と禍を遠ざける。これが「競いておのおのこれを作す」ですから、一生懸命に生きているといっても、こればっかりやっているというのですね。

もう一言。「無一怪也」（『真宗聖典』六一頁）という言葉ですけれども、「一も怪しむものなきなり」というふうに読みます。それをおかしいとすら思わない。こんなことをしていていいのだろうかと、こうも思わないと言われる。だって自分だけではありません。世の中もそうやって動いていますから。吉凶禍福。これで一喜一憂しながら生きているわけです。それが人間の幸せになる道だと思い込んでいる。でもそれは本当だろうかということをお釈迦さまが問うてくださった。

本当に満足する道

今、ほんの一言ずつだけ貪欲・瞋恚・愚痴のところを紹介しましたけれども、ここだけでもものすごく長い説法が続いています。これを聞いた弥勒菩薩が言ったのが、この講題の言葉「世人実爾」なのですね。お釈迦さまの説法、まさにそのとおりですといって、世の中の人はまことにそうなっておりますと。言われてみればそのとおりでありますというふうに受けとめたお言葉なのですね。

お釈迦さまは、この世の中の痛ましさを言うだけではなくて、だから、如来の世界、阿弥陀の教えに出遇ってくださいということを呼びかけていく、こういう一段なのです。だから単に世の中を批評している言葉ではないのですね。批評家はたくさんおられますけれども、何か上に立ってね、世の中は愚かだと。こういうふうにばかにしているように聞こえるとすると、これはやっぱり自分には届かないですね。お釈迦さまは、ご自身が本当に満足する道はどこにあるかということを求め続けてこられた。それをくぐっておられますので、こんなあり方を超えてほしいといって呼びかけるわけであります。

ですから三毒五悪段というふうに呼び慣らされておりますが、単に人間の愚かな点、毒々しい点ばかりが並べられているのではなくて、そのあり方を離れて阿弥陀の世界に出遇ってくださいということを呼びかけていく一段なのです。

もう一つだけ言葉を紹介しておきますが。「こころ塞がり、こころ閉じて」という、「心塞意閉」（『真宗聖典』六〇頁）という言葉があります。これは今の「一も怪しむものなきなり」というところの少し前に出てくるのですが、なぜ人びとは三毒のあり方をおかしいとすら思わないのかといったら、

この自分の思い込みの中、自分で考えたこと、あるいは自分で思い込んでいることに閉じこもっているからだというのです。

閉塞という言葉ですね。順序は塞閉ですけれども。塞がっている。閉じている。つまり自分の殻の中、自分の思い込みの枠の中に閉じこもって、一歩も出ない。それがおかしいとすら思わないというお言葉なのですね。ここに、こころという字が、ふたつ書いてありますが、「意」は意識している時です。でも私は目が覚めている時だけが私ではないですね。寝ている時にも続きます。それが「心」です。もっと言えば、意識を失っているような時でも私という存在はずっと続きます。身、この体がその大本でありますが、身も愚かで、精神も暗いし、心(こころ)も塞がって、この意(こころ)も閉じていると。全部が愚かである。本当のことをわかっていないということをこんな言葉で言っています。

これを受けた弥勒菩薩が、本当にそのとおりですねと言った後に、お釈迦さまの説法を聞いてこういう世界が見えましたという時に言う言葉が、「心得開明(しんとくかいみょう)」という言葉です。「こころに開明を得ました」と。こういうふうに言います。

「心塞意閉」はお釈迦さまがこの世のあり方、この世の人間の生き方を押さえた言葉であり、その教え本当にそのとおりですと受けとめたところに、心に開明を得ましたと。開けました、あるいは明るくなりましたと言うのです。

見えないということ

この明るいというのも、また我々は勝手な思い込みがあるものですから、仏法を聞いたら明るくなると聞くと、何か今日の久しぶりの青空のように、仏法を聞いたらいつでも晴れているようなイメージがあるのですが、明るいというのは見えるということです。閉塞は見えないわけです。暗闇というのはものが見えない。ものが見えないというのは、人のことも見えなければ、自分のことも見えない。見えないあり方です。

例えばさっき申し上げたことを一つだけ例を挙げれば、今も本当にいろいろな出来事が続きますが、そんな中でまたかと思わされることが、実の親がわが子を死に至らしめるという、こういう事件が後を絶ちませんね。でもそれを聞いてみると、親は親なりに、いや、殺すつもりはありませんでしたと。私なりに一生懸命でしたと言っている話が多い。これは虐待の問題もそうですね。一生懸命育てているという名の下に、子どもを本当につぶしていくということも起こるわけです。結局は自分の思いに一生懸命なだけで、目の前の子どもが見えていない。自分のこともこれでよしと思い込んでいますから、

自分のものの見方がどれほど薄っぺらいか、本当ではないかということも見えていないわけです。

ですから、開明というのは、明るくなりましたと言っても、問題が片付いてすっきりしましたという、そういう意味の明るさではなく、自分の愚かさが見えましたという明るさなのです。子どものことが何も見えていませんでしたという、こういうことがはっきりするという明るさであると言わなければならないと思います。

「心得開明」というのは弥勒菩薩のお言葉ですが、今日からバラ色になりましたと。青空ですと。そういうものではありません。いかに人間が愚かであったか、これがはっきりしました。「だから、いよいよ教えを聞いていかなきゃなりません」ということが決まるのですよ、これで。

心得開明

これもあちこちでご質問をいただくことの一つに、仏法を聞いたらどうなりますかとか、同じように、信心いただいたらどうなりますかと、こういう質問をかなりいただきます。たぶんお聞きになっている方は、今日からすぱっと道が開けて、明るくなる、こういうイメージで聞いておられるのだと思いますが、私はそれもなんとなく感じるものですから、わざとこんな答え方をします。

「仏法を聞いたら、信心を得たら、いよいよ仏法を聞いていくことが始まります」と。こういうふうに答えるのです。そうしたら、「はあ?」と言われます。そんなものご利益でも何でもありませんみたいな。仏法を聞いて、これで一丁、一件落着というかね。ゴールインしたいわけでしょう。しかし仏法を聞いたら、自分は危うい。自分のものの見方に閉じこもる生き方は、本当に子どもですら傷つけていくということが本当にはっきりしましたとなったら、いよいよ仏法を聞かなきゃならない私ということが見えるはずなのです。

だから、これはゴールインではないのです。スタートなのですね。だから信心いただいたら、いよいよ教えを聞いていきますと。親鸞聖人はそうですよね。二十九歳の時に法然上人との出遇いをとおして、本願に帰すとおっしゃった。でもあれはゴールインのお言葉ではないですよね。あそこからいよいよ阿弥陀の本願をいただいて、一生を生きていくことが始まりましたということをおっしゃっているわけです。何かそこにゴールインというようなイメージがつきまとうものですから厄介なのです。

ですから「心得開明」といっても、今日から晴れの日が続いておりますと、そんなものではないのです。これは安田理深（やすだりじん）先生がおっしゃってくださいましたが、夜が明けるということが決定的に大事なのだとおっしゃっていました。心塞意閉は夜が明けていない、暗闇の状態です。そうしたらね、雲

が出ているのか、闇が出ているのか。何と対決をしたらいいのかわからないのです。これは文字どおり闇雲だとおっしゃっていました。雲か闇に竹槍を突いているようなものだと。それでは対決したことにもならないですよね。

でも夜が明けてみれば、ああ、これは雲に私は脅かされていたのかと。闇が晴れてみれば、何が自分を脅かしていたのかはっきりすると。あとは対決することが始まるのですよ。つまり雲が消えてなくなるのではないです。これを安田先生は、夜が明けたからといって青空とは限らない。土砂降りかもしれないとおっしゃっています。雨かもしれないです。しかし雨だからとか、今日は嵐だからつまらない一日だと。そんなことになりますか。そうではないですよ。それを邪魔者と思う私が問題だった。邪魔者をいつか取り除けると思い込んでいたことの問題だった。そうしたら、その土砂降りの一日とどう付き合って生きていくか。私の人生の中身ですよね。晴れる日を待っていたら、いつまでたっても安心できないかもしれない。不安なままかもしれない。安田先生は不安でも生きていく道とおっしゃるので、不安でよくないみたいに聞こえるといけませんが。とにかく、安心と言っても、自分の都合の悪いことが消えるように思ってはいけないと。それを自分が見えるという意味での「心得開明」ということ。ここが大事だと私は思います。

痛ましさを超えて

今日初めに申し上げましたが、このお釈迦さまの説法というのはどこにあるかといったら、聞いた人の上にあるのです。この『大経』の下巻の説法もどれだけの人が遇われたかわかりませんが、弥勒菩薩が、お釈迦さまの説法にまさにそのとおりです。世の中の人間はそういう生き方になっておりますと聞き、受けとめた。そこにお釈迦さまの説法があるのです。

今日は貪欲・瞋恚・愚痴の三毒の煩悩のお話をしましたが、痛ましいことになっておりますということに気がついた。そこから、その痛ましさをどう超えていくかということが自分の課題になるわけです。

貪りにはまっていても、そんなの当たり前ではないかと。世の中もそうなのだからといったら、超える必要があるとは思わないですね。あるいはやられたらやり返せ。それが当たり前だとなっていたら、そのあり方を超えていこうなんていうことは自分の課題になりません。本当にそうですねというところから、自分はこの私とどう向き合っていくのか。こういう問題にやっと目が転じられるわけです。

それが今回のことで言えば、コロナが悪い、コロナのせいだというふうに言いたい根性はあるわけですよ。コロナさえなければ日常の生活は奪われなかったのに、と。それもそのとおりです。しかし生きているということは、そういうことが起こってくるという事実、そこに立った時に、コロナだけ

を邪魔者だと言うのではなくて、その邪魔者をなくして生きていこうとしている、その私が初めて問題になるという。そういうことを浮き彫りにしたのが、今回のことから明らかになったことではないかと申し上げたいわけです。

ただ、そうは言いましても、コロナのおかげですなんて言う根性は私にもありません。これさえなければという根性はわくのですが、それをまた誰かのせいにして、それさえなければと言おうとしている。その私を見せてもらえるということが今日お話ししたかった、お釈迦さまの説法に遇った弥勒菩薩のお言葉だということであります。

今日は三毒段のところだけでしたが、あと五悪段もずっと続きます。ぜひともこれに関心をもっていただいたら、この『大経』の下巻をご一緒にまた読み進めたいというふうに思うことであります。時間になりましたので、ここまでとさせていただきます。お聞きくださいましてどうもありがとうございました。南無阿弥陀仏。

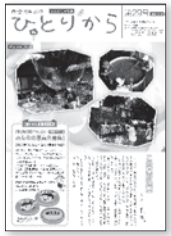
しんらん交流館の発行物のご紹介

教化研究
教学研究所編
年２回発行
A5 判／ 200 頁程度
価格：1,500 円(税別)
※価格は頁数によって変動することがあります。

ともしび
教学研究所編
毎月発行
B5 判／ 10 頁
価格：130 円（税込・送料別）
年間購読 1,500 円（税込・送料別）

身同
解放運動推進本部編
年１回発行
A5 判／ 100 頁程度
価格：1,200 円(税別)
※価格は頁数によって変動することがあります。

注文方法
『教化研究』『ともしび』『身同』の
お求めは東本願寺出版 まで
TEL 075-371-9189
FAX 075-371-9211
books@higashihonganji.or.jp
東本願寺出版　検索　click



子ども会情報誌 **ひとりから**
青少幼年センター編
年２回発行
A4 判／４頁
無償
青少幼年センターホームページ
http://www.higashihonganji.or.jp/oyc/publication/

真宗教化センター
しんらん交流館たより（第６号）
―いま、あなたに届けたい法話 Ⅱ

発行日　2021 年１月１日
発行者　但馬弘
発行所　真宗教化センター（しんらん交流館）

〒600-8164　京都市下京区諏訪町通六条下る上柳町 199 番地
ＴＥＬ075-371-9208（代表）　ＦＡＸ075-371-6171
E-mail shinrankoryukan@higashihonganji.or.jp
しんらん交流館ホームページ（浄土真宗ドットインフォ）
https://jodo-shinshu.info/
浄土真宗ドットインフォ　検索